

染 香

ぜんこう

福 泉 寺 寺 報
令和7年5月
第 133 号
毎月 1 日発行

萩本欽一さん

妻の澄子さんが二〇二〇年八月に亡くなりました。欽ちゃんの三つ上の八二歳。欽ちゃんにとっては「妻というより三人の息子の母ちゃん」。葬式も「賑やかなのはヤメてね」と息子には相談していたそうです。

金ちゃんが十八歳で浅草の東洋劇場に入ったとき、澄子さんは劇場で一番人気の踊り子さんでした。

舞台でコメディアンとして汗を流して三年たったころ、師匠の東八郎さんが「欽坊もドサ回りしてこい」。先輩のいない地方巡業で腕を試してこいと言われたのです。でもそんなことをするお金もない時、友人が「一番お金を持つていそうな人を呼ぼう」とシャレのつもりで呼んだのが澄子さん。会も終わって帰る時、澄子さんはネックレスを外してクルクルと丸めて欽ちゃんの方に投げました。「お金に困ったら質に入れたらいいよ！」欽ちゃんはドサ回りの間、それをポケットの中に入れて、すぐそばに澄子さんを感じていたそうです。

ほかに、心が震えるような二人の物語が『ありがとうだよスミちゃん 欽ちゃんの愛妻物語』に収められています。



ホームページ



おて LINE



子ども行事



教科書通りしなくてもいい

澄子さんはガンにかかり、その四年後に息を引き取りました。

一年後のインタビューで欽ちゃんは「スミちゃんに線香はあげない」と言っていました。欽ちゃんは六年前に駒澤大学仏教学部に社会人入学しています。なので、なおさら線香をあげない『頭でっかちな理由(そもそも仏教では線香は：とか現代仏教に対する批判的態度)』を持つているのかと思いましたが、違いました。

欽ちゃんは、線香を「あげない」のではなく「あげられない」のです。「だってそんなことしたら、スミちゃんがまるで死んじゃったみたいじゃない」と。

私は僧侶として、線香や焼香の作法を皆様にお伝えしてきました。またそれが私の務めです。けれど、「もし受け入れられなかったら、無理矢理しなくてもいいですよ」とは言わないで来たように思います。

それによって、戸惑い、しんどい思いをしていた方もいらっしゃるのかもしれないと思ったら、思い当たりそうな皆さんの顔が思い浮かび、またその中にはすでに亡くなられた方もいて、急に涙が出てきて、止まりません。

(住職)

いまさら仏教!!

【五色幕・五色旗】

大きなお寺で時々、五色の幕や旗を見かけますが、色ごとに意味があります。



青：心の落ち着いた状態(禅定)。仏陀の頭髪の色。

黄：動じない姿(金剛身)。仏陀の身体の色。

赤：精進、慈悲の心。仏陀の血の色。

白：清浄な心で悪業や煩惱を清める。仏陀の歯。

樺：袈裟の色。侮辱や誘惑に耐える(忍辱)。

こうしてまとめてみて、改めて思うのですが、やはり私たちは、幸せになるためには、相手や環境を変えるのではなく、自分自身が変わっていくことが王道なのでしょう。

まずは変わるべき私の姿をはっきりと知ることが大事なのです(如実知見、といいます)

ちょっと あたまの こりほぐし

奈良の大仏さまと鎌倉の大仏さま、
どちらが先にたったでしょうか？

★答えは裏面です



おてらより

西本願寺・比叡山へ参ろう

『第五十五回念仏奉仕団』

日時：六月十九日(木)～二十日(金)

★比叡山延暦寺は大改修工事中。普段はないようなご案内があります！

ピアノミニリサイタル

日時：六月二十八日(土) 十三時三〇分

★第2回となります♪

★今回はさらに素敵な選曲、それから、

「素敵な楽器」も登場。



施設訪問、出来る時に…

★縁あって、現在二か所の施設の入居しているご門徒さんのところに面会に伺っています。面会、というよりも、楽しくおしゃべりに行くような気分です。もしご希望があればおっしゃってください。大変ありがたいです。

口蓋垂こうがいすい

私が師範学校を卒業したのは昭和七年、不景気のどん底であった。「八級下棒当分四十八円」というのが私の初任給であった。「八級下棒」は「五十円」なのであるが、一円引きの四十八円が初任給で、一年たってようやくほんとうの「八級下棒」にしてもらうという時代だった。賞与なんか、もちろん一円もなかった。

学校に弁当をもってくるこのできない子どもがたくさんいた。昼になると、こっそり水をのんで腹を満たしている子どもを見ていると、世の中の仕組みに疑問なきを得なかった。私自身徹底した貧乏の中で育った。秋から冬にかけての主食は「チヨボイチご飯」と称するものであった。大根を米粒くらいの大きさに刻み、米を洗った汁をためておいてそれで大根を焚き、少し米を入れて焚いたご飯である。副食は漬物に決まっていた。小学校五年の時には親類の借金のおおりを受けて家財道具の差しおさえも受けた。そのことから発奮してうどん箱を机に勉強、五年生から中学の試験を受けて合格したが、貧乏のため進学を断念、六年生に進んだ。学校では六年生であるが、家へ帰ると通信教育の中学一年生であった。分の厚い講義録を、うどん箱の机で勉強した。高等一年のとき、小学校准教員の検定試験を受けにいったが失敗した。独学というものがどんなにむずかしい能率のあがらぬものであるかが骨身にしみてわかった。貧乏でも勉強ができる学校といえば師範学校だということがわかり、奨学資金をもらって師範に入った私であった。

そういう私の経歴のせいもあり、その頃、ひそかに進歩的教師の間にひろがりつつあった階級闘争的な思想が私をとらえていった。「支配階級にとって都合のよいことが『善』であり、都合の悪いことが『悪』である」という彼らの理論の確かさに目を見はった私は、いつの間にか「宗教は阿片あへんなり」をも信じずにおれなくなっていた。

しかし、日本一の貧乏寺ではあっても私は寺の長男であった。病気がちな父に代ってお勤めもした。

正信偈の後で蓮如上人の御文章を読む。「五劫思惟ノ本願トイフモ・・・」と読みかけて「こんなでたらめが信じられるかい」と思う。そう思いながら読んでいる自分の矛盾を思うとやりきれない。その頃の私の日記のノートには「五思惟ノ本願トイフモ兆載永劫ノ修行トイフモ・・・しみじみと偽僧侶の罰深し」とある。

昔からのしきたりにそって、盆がくると村中を阿弥陀経を読んで廻る。お経を読みながら「宗教は阿片なり」と思う。その自己矛盾がまたやりきれない思いをかきたてる。その頃の私の日記。「阿弥陀経に明け暮れる日、ひょいと無神論が頭をもたげて、ああわしはしらんぞ」。お勤めをしているとねずみがお仏飯をたべに出てくる。ねずみにまてばかにされる仏さまに何ができるかと思うとばかりしくなる。ところが、信じてもない、ありがたくも思っていない仏さまを拝み、お経を読み、お供ものをさせてそれをよこしている私はあのねずみの何層倍もおそろしい罪の深い ねずみではないかと思うとたまらなくなる。

このような私を、ハッと目覚めさせてくれたのは、私が教えてやらねばならぬ筈はずの、私の受持ちの子どもであった。

そのとき、私は高等科を担任していたが、三学期の終り、授業のすべてを終った私は「これでこの学年の勉強は全部終わったが、何か質問はないか？」といったとき、北村君という子どもが挙手した。私はギクツとした。北村君は、母一人子一人の貧しい家庭の子どもで、小学校三年のときから、毎朝三時半に起床、豊岡の町を新聞配達して廻り、帰って朝の勉強、それから朝食をとって学校にやってくるという子どもであった。学校が終わるとんで帰って夕刊配達をやっている北村君であった。お母さんがきびしい人で「おまえの本職は勉強だ、新聞配達をやっているからといって授業中いねむりをするようなら、新聞配達なんかやめてしまえ」といっているようなお母さんであった。だから、夏の暑い午後なんか、子どもたちの中にはいねむりする者もあったが、そんなときも北村君は、まっすくな姿勢とにらみつけるような目の玉で授業を受ける彼であった。その彼が「ハイッー」と鋭い声で挙手するのであるから、私もギクツとせずにはおれなかったのである。私もギクツとせずにはおれなかったのである。

指名すると彼は言った。「先生、アと口をあけると、のどの奥にペロンと垂れたぶさいくな形のものが見えてきます。あれはどいつはたらきをしているのですか？」と。

「北村君、すまんがあれの役目を知らんわい、きよう帰って調べてみるから明日まで答を待ってくれんかい」としか、私には言い様がなかった。彼が

尋ねているものがあることは知っているが、それがどういつ名前のものであり、どういつはたらきをしているものであるかを、私は全然知らなかったからである。

その夜、人体に関する参考書のありったけを引っぱり出してみて、あののどの奥のペロペロが「口蓋垂」というものであること、のどの奥の岐れ道わがのところ、食物が気管の方へ行かないよう、食物をのみこむときには、気管の入口をふさいでくれるはたらきをしていることがわかったとき、私は頭のおがらぬ感動のとりこになってしまった。それが、どんなはたらきをしているか知らないくらいだから、すまないなあと思ったこともない。ありがたいと礼をいったこともない。それどころか、俺が生きてやっているのだというような態度で生きてきたこの私のために、私が母親の乳をのみこみはじめたそのときから、はたらきどおしにはたらきつつづけてきてくれたはたらきがあったということに目が覚めたのであった。気がついてみると、それは「口蓋垂」だけではなかった。

目も耳も鼻も口も、手も脚も、心臓も、胃も腸も……私のいのちにかかわる呼吸さえもが、私のためにはたらき続けてくれているという事実が目覚めさせられたのである。生かされてここのまできた私を知らされたのである。そして、それまで、何げなしに読みすごしていた「凡聖逆誘齊廻入ぼんぜんぎきしきかいにゅう」が、私のためのおはたらきだったと実感をもってつかせてもらえたのであった。

